

郷土研通信



ミズバショウ
アイヌ語名 パラキナ（幅広い草）
屈斜路-イソキナ（熊草）
細川音治著
『阿寒・摩周の植物』から

発行：てしかが郷土研究会（Teshikaga Regional Studies Association）
北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10（松橋方）

文章責任：松橋 秀和

近況報告

種市資料移動先 本棚の完成



完成した本棚

二月二六日に会員七名の作業で、資料の移動先となる「ふるさと歴史館」の二階観覧席を摩周収蔵庫へ搬入しました。二八日に本棚資材及び寸法にカットを発注し、三月六日に資材が入荷しました。三月七日から本棚制作作業を開始し、一四日に組立が完了しました。作業日数七日間、延べ作業員数三一人工でした。作業にあたられた会員の皆さん、大変お疲れさまでした。

社会教育課と種市資料の移動日程を協議しますので、決まりましたらお知らせします。決まりましたらお知らせします。

「ふるさと歴史館」 作業スペースの拡充

「てしかがの蔵」の郷土研事務室で使用していた事務資料を種市資料の移動と併せて移動するべく、その資料を保管するスペースを確保するため、摩周収蔵庫から本棚四基を移動しました。ただし、棚を乗せるダボが行方不明のため只今発注しています。

また、某所から事務所を閉鎖するため、カラーコピー機、小型キャビネットなどの什器類の提供がありました。摩周収蔵庫に仮保管しており、種市資料の移動、郷土研事務資料の移動が一段落したら整備します。

特別講演収録集2号

過日令和七年一月二二日に行われた、高田中氏（元弟子屈町商工会長）の特別講演（オーラルヒストリー）を収録した冊子が小林会員のご努力で発行され、例会に出席した会員に配布されました。

ました。

公式の記録に残らない、もう一つの歴史の記録を後世に残すことも、当会の活動のひとつです。



勉強会

「弟子屈町にくれば
北アメリカ大陸
西部の植生が見られる」

講師・・・元玉川大学農学部
技術指導員 金井秀明氏

氏がご経験されて来られたカナダやアラスカのアメリカ大陸西海岸の自然環境の様子をお話ししてくださいました。

氏がご専門としておられる立場からのお話を聞いていて、現地の動植物

の名称にはアイヌの人たちが付ける名称や利用の方法など、アメリカ大陸西海岸の自然環境と弟子屈地域の自然環境と見間違えるような類似した点が多くあることを知ることができました。

講演の概要をお尋ねしたとき、「川湯の森を見ればカナダ、アラスカの森に行ける」と提示されました。なるほど、その謎が解けました。

次回の例会

令和七年四月一六日（水）

一九：〇〇

ふるさと歴史館

勉強会

会員座談会

「アトサヌプリを語る」

我々の身近にあるアトサヌプリ（川湯硫黄山）にまつわる歴史や自然情報は、会員の皆さんはそれぞれ持っていることから、あらためて語り合ひましょう。

むかしむか史写真館

No.352

摩周湖の中島

摩周湖の湖岸（左）と中央付近にある小さな中島、カムイシュ島（右）を写した二枚の写真。一九三三年以前に発行された古い絵は、の道路が開通したため、一九

がきのものですが、撮影された時期は不明です。一九二九年一月に弟子屈の街から現在の第一展望台まで



「鬼工の妙人魂を搏つ摩周湖岸の絶壁」



「摩周湖中に霊姿を泛ぶる神島側壁の断崖」

一九二九年の摩周湖とカムイシュ島の様子は、近代スキーでは草分け的人物の猪谷六合雄（いがやくにお）の自伝『雪に生きる』に描かれています。今では立ち入ることさえできないこの神秘の湖に、猪谷六合雄と妻サダは筏を作って漕ぎ出し、カムイシュ島に上陸しています。しかも急な崖ばかりでほとんど平坦な

一九三〇年から一九三三年頃に撮影された可能性が高いのですが、一九一七年にはすでに透明度調査が行われた最初の記録が残っているもので、さらに古い時期に撮影された可能性もあります。一九二九年七月、彼らは旅の途中でこの地域に二ヶ月ほど滞在していた際、摩周湖を訪れてその美しさに心を奪われます。そして、どうしてもカムイシュ島に足を踏み入れたくなり、食糧や鋸、ロープなど必要なものを揃えて上陸する準備を進めます。



2021年に調査に同行した際に筆者撮ったカムイシュ島の近景

安藤 心 筆



『新版 幸に生きる』2021年 カノア（昭和18年版を新装復刊）
装画 牧野伊三夫（木版画）

立ち、そこで枯れ木を切り出して筏を作ります。この即席の筏に乗って漕ぎ出し、南風に押しもらって一時間半ほどで無事カムイシュ島に辿り着きます。ところが、岸に着けておいたその筏は、波風によって一晩で壊されて流されてしまいました。絶体絶命の状況に陥った彼らは、今度は島内の枯れ木を使って再び筏を作り漕ぎ出しました。南風に押し戻され、遭難しかけながらも七時間漕ぎ続けて命ながら帰還する、という今では信じがたい冒険の一幕が綴られています。